

はしやすめ
その一
.....

なぜ「納豆」は「なつとう」と読むのか

漢字には、「納」を「ノウ」と読む〈音読み〉と「おさめる」と読む〈訓読み〉があることは、皆さんもよくご存じだと思います。〈音読み〉はさらに大きく、呉音・漢音・唐宋音の三つの読み方に分かれます。

たとえば、そのことは次の熟語の読みからわかります。「修行」・「行動」・「行灯」の「行」の字は、それぞれ「ギョウ」・「コウ」・「アン」と読めます。これが呉音・漢音・唐宋音にあたるのです。どの漢字にもすべてこの三つがあるとは限りませんが、基本的には漢字の音読みは一通りではないのです。

「納」という漢字を「ノウ」と読むのは、この「呉音」にあたりま

す。この呉音とは、もともと中国の南方の発音に基づいた漢字の読み方といわれ、日本には七世紀頃までに伝わったとされています。やがて多くの漢字の読みは漢音に代わられていきますけれども、仏教関係の語の多くは呉音をそのまま継承して読んでいるものが多いのです。たとえば、さきほどの「修行」もそうですが、仏様の前でお経を唱える「勤行」を、「キンコウ」と読まないで「ゴンギョウ」と読むのもそうした理由によると考えてよいでしょう。

「納豆」^{ナットウ}という読み方は、「納」の呉音の「ノウ」の慣用的読み方である「ナツ」(納得)・「ナ」(納屋)・「ナン」(納戸)のなかの「ナツ」が使われているわけです。

納豆はおそらく寺院を通して日本に伝来したため、このように呉音を元とした読み方が、ながく継承されてきたものと考えられるでしょう。ごナツトク、いただけましたでしょうか。

では「豆」の方はどうなのでしょう。こちらは「大豆」のように呉音の「ズ」ではなく、「豆腐」のように漢音で「トウ」と読んでいます。

漢字の熟語は本来はどちらも呉音で「ナツズ」と読むか、漢音で「ノウトウ」と読まれるべきところのようです——かつて職場を同じくした漢文のS先生との飲み会の席でのご教示によります——。「納豆」は漢字の音の点からも、やはりバランス食品になっているといえるのでしょうか。
